

## 過疎地、七尾、能登こそ 子どもを産み育てやすく



小児科 泉 達 郎

七尾市生まれ、七尾東部中学校、七尾高校卒業後、三重：三重県立大学、東京：東京女子医大、東大、国立精神神経研究所、NY,USA:Albert Einstein医大、大分：大分大学と移動し、定年退任後、ほぼ50年ぶりに故郷に戻り、地域の小児科医、小児神経科医をしています。七尾、能登半島は大伴家持の万葉集にも記載があり、長谷川等伯生誕の地、七尾城址、和倉温泉のある歴史ある街ですが、少子高齢過疎化の波は大きく、2007年3月能登半島地震によって、能登半島全体で更に加速されています。これは、2011年3月東日本大震災、福島原発事故に伴う被災地よりの人口流出が、従来、少子高齢過疎化であった地域が、更に加速しているのと同様の動きでもあります。

故郷に戻り、その中で生活をすると、街の衰退、商店街、造り酒屋の減少、小中学校の廃校と統合、医院の減少と廃院跡に故郷の衰退を痛感させられます。まさに、地域の再生、存続自体が危うい状況になっているように思います。

当七尾病院は長年、常勤小児科、小児神経専門医は不在で、七尾だけではなく、能登全体で、小児科医の不足は深刻です。子どもはご両親の愛情の下、満期在胎40週、3kg、50cmで生まれ、元気に泣き、母乳を吸い、大きくなり(成長)、たくましく二次性徴し(成熟)、賢く(発達)なっています。途中、風邪をひき、熱を出し、咳や下痢、けいれん、言葉の遅れ、学校の成績などに悩まされる事があります。七尾病院小児科では、成長や成熟障害、発達障害やけいれんなどに関係する障害児医療、小児神経疾患を専門に担当しています。身体が大きくなならない、筋肉が弱く、力がなく、なかなか歩かない、目が合わない、言葉が出ない、こだわりが強い、落ち着きがない、けいれんやてんかん発作がある、などの子どもの神経疾患を専門的に対応しています。

重症心身障害児(者)医療や小児神経、発達障害医療の低下は街における子どもの保健活動にも影響を及ぼし、“子どもを産み育てやすい街”の形成に大きな影響を及ぼします。生まれた子どもが知的障害、運動障害、けいれんを呈すると、治療、リハビリのために医療施設の揃う都市部の大病院、専門病院を受診し、通院し、更に、家族全体で、その地域に移動して行く事が少なくない事に気付かされます。ここ七尾、能登が“本当に、子どもを産み育てやすい街”、“若い夫婦が住み生活できる街”であるという認識と安心感を形成するためには、医療は社会の最も基本的な“infrastructure”であり、その中でも小児医療、保健活動の整備、発達障害児医療とその早期発見と支援のための健診活動の整備、充実が必須であり、七尾、能登の人口流出の抑制、出生率の上昇に少しでも貢献したいと考えています。